中国古典選 35

唐宋八家文 一

清水 茂

朝日新聞社

監修 吉川幸次郎

中国古典選 35　唐宋八家文（一）

昭和53年11月 5 日　第 1 刷印刷
昭和53年11月20日　第 1 刷発行

定価400円

著　者　清 水 茂

発 行 者　朝日新聞社　藤 田 雄 三
発 行 所　朝日新聞社　東京　大阪　名古屋　北九州
印刷製本　内外印刷株式会社　凸版印刷株式会社

0198-260135-0042 ©SIGERU SIMIZU 1978

唐宋八家文

（一）

清　水　茂

監修　吉川幸次

朝日新聞社

表紙・扉　伊藤鑛治

まえがき

唐宋八家文は、封建社会のもと、種種の制約を受けながらも、当時の最もすぐれた知識人たちが、自己のことばを最も有効に用ちいて、借りものならぬ自己の思考と感情を書きつけた散文である。その表現の適切さは、われわれを共鳴させ、その説得の熱情は、われわれをとりこにする。かれらの感傷は、われわれの魂をゆさぶり、かれらの智恵は、われわれの生活をゆたかにし、そしてかれらのとりあげた問題の多くは、現代に生きるわれわれの問題でもある。この書物は、かれらの文学が、思考感情が、いかに現代にも生きつづけているかを多く取り上げるつもりである。もしも懐古趣味で読む人があれば、おそらく失望するであろう。わたくしは、老人のために書きたくない。これからの人人のために書くのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

まえがき
解説……七
韓愈　二七
孟東野に与うる書……三五
孟東野を送る序……四八
温処士の河陽軍に赴くを送る序……六六
董邵南を送る序……七五
李愿の盤谷に帰るを送る序……八一
柳子厚を祭る文……九八
十二郎を祭る文……一〇八
女挈の壙銘……一二九
殿中少監馬君墓誌……一三五

南陽樊紹述墓誌銘……一四四
試大理評事王君墓誌銘……一五八
石鼎聯句詩の序……一七六
毛穎の伝……一九四
雑説㈠……二二五
雑説㈡……二二七
雑説㈢……二二九
雑説㈣……二三三
原道……二三九
仏骨を論ずる表……二五八
師の説……二八〇
衢州徐の偃王廟の碑……二九二

解　説

一

中国古典散文文学の主たる作品は、小説ではなく、古代における哲学的著作や歴史を除き、たいてい一種のエッセイである。しかし、それはモンテーニュの著わしたような筆にまかせた「随筆」ではなく、一つの主題のもとに、それと関連のあることについて自己の意見を集約的にあらわすものである。例えば、書物の序を書いたばあい、その中に自己の文学論を述べたりすることも稀ではない。

こうしたエッセイとしての散文文学を確立したのは、唐の中頃、八世紀後半にでた韓愈（かんゆ）であり、その最もすぐれた作品も、また、韓愈によって書かれた。かれの生きた時代は、中世的貴族中心の時代から、近世的市民・中小地主階級中心の時代への過渡期であり、文学上においても、一人の天才の手によって、大きく転換されることが期待されていた時期である。そこにかれ、韓愈が鞏固（きょうこ）な指導者精神を持して、新しい文体を創始したのである。しかし、かれは、スローガンとして、古代散文文体への復帰を叫んでいた。なぜかれは、古代の文体への復帰を叫んだか。そしてまたなぜこの韓愈の新しい文体をかえって古代の文体、古文というのであるか。それには中国散文文体の歴史についてごく簡単に展望しておくことが必要であろう。

二

散文は、詩におくれて発達するというのが、世界のあらゆる民族に共通することである。古典ギリシャにおいても、トゥーキュディデースの歴史やデーモステネースの弁論演説は、ホメーロスの叙事詩やサッポーの抒情詩よりも後のものである。中国にあっても例外ではない。「詩経」の詩が文学としてかなりの程度に完成しているのに対し、最古の文学的散文である「書経」は、詰屈聱牙（きっくつごうが）という、その評価の語感が象徴するように、ごちごちとして不完全な言語である。

散文の技術が、完成したといってよいのは、紀元前四世紀より三世紀にかけての戦国時代に現われた孟子荘子などのいわゆる先秦諸子、すなわち思想家たちの哲学的著作と、多くの雄弁家や外交官の弁論の記載をも含む歴史書、たとえば「春秋左氏伝」、「国語」、「戦国策」などであり、紀元前一世紀、前漢の中頃に出た司馬遷（しばせん）が著わした「史記」は、こうした散文技術を集大成した最大の成果であった。

しかし、こうした古代の散文が、いずれも、個人の主観や感情をはなれた、哲学的著作や歴史書であったことは、注意されてよい。それらは、あらゆる人に対して客観性を主張し、説得して止まない力を持つ。それらは論理と事実による動かせない威力を示すのである。

そしてまた、これら古代の散文の現われた戦国時代より前漢にかけては、動乱の時代か、またはやや安定したとはいえ、比較的階級が固定しなかった時代であったことも注意すべきであろう。

これが、紀元前一〇〇年頃の漢の武帝の時代をエポックとして、社会の固定化した時代に移る。

これは、儒家が、孔子のあの活気にみちたものでなく、もっと保守的な形のものとして受け入れられ、それが教育の中心となり、国家より保護を与えられたためかも知れない。その象徴的な事件は、古代の王朝として理想化された周時代の、理想化された制度を実践しようとした王莽の簒奪であり、前漢はここに亡び、高祖自身がそうした出身であったことが象徴であるように、遊侠的気分がなおみちていた時代はうしなわれたのであった。

後漢の光武帝は、インテリであった。そして後漢は文を尚んだ時代であった。この頃より名門の地位が定まり、貴族中心の政治に移っていく。後漢のあと、魏晉南北朝といわれる三世紀より六世紀までは貴族中心時代の最も典型的なものである。

文学もまた貴族化し、散文も例外ではなかった。事実と論理とによる力よりも、つりあいと用語による美がおもんぜられ、言語現象の反省による音楽的美の追求が試みられた。中国語に四つのアクセントの型、いわゆる四声があることが発見されたのも、この時代であったのである。この時代の散文は、対句とアクセントのつりあいを中心に、典故や文字の機智的使用により、対象をいかに巧妙にこの型の中にあてはめて表現するかに重点が注がれた。対句を主とする故に、二頭立ての馬車の名を借りて、その文体は駢文と呼ばれる。それは、例えばつぎのようなものであった。

文思安安。欽明所以光宅。
日月光華。南風所以興詠。

文思安安、欽明の光ち宅る所以、
日月光華、南風の興え詠う所以、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日角之主。出自諸生。
銳頂之君。少明古學。
漢高宋武。雖闕章句。
歌大風以還沛。
好清談於暮年。

夫

成天地之大功。
膺樂推之寶運。

未或不

文武兼資。
能事斯畢

者也。

日角の主、諸生より出で、
銳頂の君、少くして古学に明きらかなり。
漢高宋武、章句には闕くと雖も、
大風を歌いて以て沛に還り、
清談を暮年に好みぬ。

夫れ

天地の大功を成し、
楽推の宝運に膺るは、

未だ

文武兼ね資け、
能事斯こに畢くさ

ざる者或らず。

これは梁の沈約（四四一―五一三）が書いた「梁の武帝集の序」の書き出しの数句であるが、ちょっと読んだだけで、意味がすっきりと分かるものではない。しかし、実は、この音調は、非常にととのって美しいものなのである。まず第一に、その大部分は対句よりできている。すなわち上を括弧でくくったのが、その一対ずつを示す。まず「文思安安、欽明の光ち宅る所以」と古代の聖帝堯のことを「尚書」にもとづくことばでもって表現すれば、「日月光華、南風の興え詠う所以」と、今度は堯につづく聖帝と伝えられる舜のことを、「史記」にのせられたものがたり

によって記す。この二つは単に内容が対をなすだけではない。言語上も対をなす。上が四音節、下が六音節であるばかりか、その各語の句中における機能もおおむね相応ずる。さらに、その句中の重要なポイントたる語のアクセントが対立しあわねばならぬ。こうした場合、四声よりも、もっと大きく区別し、平らかなアクセント、すなわち平声と、なんらかの形で高低をもつアクセント、すなわち仄声とが、規則的に交代し、対立する。さきほどの文章では、○が平声の字を、●が仄声の字をあらわし、○●がつけられている文字が、その句中の音声上重要なポイントをなす字である。ここでは、第一句が思（仄）安（平）と平仄が逆になり、つぎの第二句が明（平）宅（仄）とお互いが逆になると共に、第一句とも平仄が逆になるのである。つぎの二句は、前二句と対していて、本来は、前二句と平仄がすっかり逆になり、平仄、仄平となるはずだが、そうなっていないのは、むしろ異例である。しかし、この二句だけについていえば、ちゃんと平仄の規則を守っているのである。つぎの「日角の主、諸生より出で、鋭頂の君、少くして古学に明きらかなり」も、ほぼ同じことを別のことばで表現した対句である。日角は、君主たるべき一種の相をいい、鋭頂も、あきらかではないが、やはりとんがり頭が、貴人の相であるという伝えがあったもののように思われる。そしてここは、角（仄）主（仄）、自（仄）生（平）、つぎに対句の下の二句に移って頂（仄）君（平）、明（平）学（仄）と、最初の角が平声であるはずのところ、仄声となっているほかは、ちゃんと平仄がととのっている。以下「漢の高（祖）宋の武（帝）、章句（経学）には闕くと雖も、（高祖は）大風（歌）を歌いて以て沛に還り、（武帝は）清談を暮年に好みぬ。それ天地の大いなる功を成し、楽しみ推す宝き運に膺るは、未だ文武兼ね資け、能

事ここに畢くさざる者あらず」という文も、句によって、いくらかのちがいはあっても、四字と六字との対句を中心とし、また平仄もほぼととのえられていること、以上に説明した部分と同じである。

この例にも見られるように、駢文にあっては、思想よりも言語の美が、したがって事実や論理より、巧妙な表現による言語の幾何学的均整や絵画的色彩が尊ばれる。この「梁の武帝集の序」の書き出しも、帝王と文学とが、密接な関係を持っていることを、多くの故事を用い、美しくいいなしているにすぎない。駢文は散文とはいうが、実は甚だ詩的要素を多く含むものなのである。

こうした言語の美を第一とする駢文の時代が、南北朝をすぎて唐までつづく。唐も基本的にはやはり、門閥がものをいう時代であった。宋の欧陽修らがおそらくは唐の時代より伝わった系図を用いて編纂したと思われる「新唐書宰相世系表」は、そうした事情をあきらかにする。こうした名門が重んぜられた社会も、八世紀の後半におこったあの安禄山・史思明の乱を機として変化が起こる。地方軍閥は、実力を次第に増加し、各地に半独立の形をとりつつ、唐の王室をおびやかす。文官でも実力が次第に尊ばれ、実力派と門閥派は、党派を作ってはげしく争いをする。宦官が、それにわりこみ、遂にたくみに王室の実権をにぎってしまう。そうした各勢力の抗争のかたをつけたのが、地方軍閥の一方の雄で、のちに唐を滅した、後梁の太祖、朱温であり、貴族の有力者たち、清流と称された人人を、かれは白馬渡の濁流に投げこんだ。貴族政治は、ここに完全におわりを告げるのである。

韓愈は、この社会の転回点、安史の乱後遠からぬ、白馬渡の事件にはるかに先立つ時代に生を受けたわけで、韓愈以前にすでに幾人か、駢文をもっと自由な散文に改めようと試みながら、不成功におわったのを見事に成功させたのは、かれの卓越した才能、指導者精神などによるものとはいいながら、時代がこういう古文のような自由にもののいえる文を要求する市民と中小地主中心の時代に、次第に移りつつあったことを見のがしてはならない。韓愈の古文運動の部分的成功、しかもその決定的勝利が、後に述べるように市民・中小地主の勢力が貴族・大地主よりもはるかに強くなった北宋時代の欧陽修まで持ちこされたことは、文学が社会変動と無関係でないことを示すものであろう。

三

封建社会にあっては、革命はしばしば復古という形式を取る。明治維新は、同時に王政復古でなければならなかった。韓愈の場合も例外ではない。新文体であるからこそ、それに「古文」と名づけ、古代文体への復帰と叫ばねばならなかったのである。韓愈の古文が、もしも、古代文体の単なる復活であったなら、おそらく他の人たちに、あれほどアッピールすることはなかったであろう。

韓愈は、駢文を否定したというより、アウフヘーベンしたのであった。かれは、その文章の構造を、漢以前の古代のそれにもとめつつ、発想や語彙には、駢文を通して積まれて来た洗煉された技巧を取り入れて、新しく市民と中小地主が中心となった社会の新しい散文としたのであった。

清の劉開（一七八一―一八二一）が、「韓愈の文が後漢より隋に至る八代の衰を起こしたのは、八代の文をすっかり否定してしまったということではない。ただ八代の精を取ってその粗さを汰し、その腐びたところを化してその奇れたところをとりあげたまでである」といった意見は正しい。われわれが、今日なおその生き生きとした言語に喜びを感じ、その取り上げた問題に多くの共鳴を持つのは、韓愈が、従来の中国の散文精神を集約して、提出してくれたからにほかならない。

だが、韓愈について多く語ることは、ここでは差しひかえよう。その実例はあとでいくつも示されるであろうから。われわれは、先へ急ぐことにしよう。

四

韓愈の古文運動には、幾人かの熱心な同志を得た。そのうち、最もすぐれた作品を残したのは、韓愈の兄の友人の子であり、一時は同じ役所につとめた柳宗元であった。こうした一部の支持を得たものの、それが一般社会通行の文体になることは、容易のことではなく、唐の末から五代宋初にかけて、すなわち、九、十世紀において、中心となる文体はやはり駢文であった。たとえ古文で書かれた文章があっても、それは甚だ未成熟であって、句読の施しがたいところさえすくなくないものであった。

宋にはいって、百年、平和主義をモットーとして、なるべく諸外国と戦いをまじえることをひかえた宋朝の政治は、経済的に余裕をもたらし、その上、中国では、ある意味でエポックをなす

一人の君主の長い治世――たとえば漢の武帝、唐の玄宗はそうであった――そのような時代がおとずれた。すなわち仁宗（一〇二二―一〇六四在位）がそうである。その四十三年間にわたる治世は、北方の契丹の圧迫を受けながらも、表面的には太平の御代を現出し、市民の経済力は大いに発展し、宋の首都東京開封府では、寄席などができて、今日の「三国志」などの長篇歴史小説の原型となった講談が行なわれたという。

こうした時代に、韓愈の古文に典型を見出し、平易な散文を主張した一人の天才が現われた。その才は至らざるなく、あるいは経学に、あるいは史学に、そして文学に、いずれもめざましい業績を残した欧陽修（おうようしゅう）その人である。

欧陽修は、韓愈をまねたとはいいながら、その文体にはかなりの差がある。韓愈は、凝縮されたことばの中に、感情をこめる。その文は力があり、きびきびしている。欧陽修は、自分の意志を相手に納得させるまで、説き尽くす。その文はおだやかで、ねばりがある。中国近世哲学の大成者南宋の朱熹（一一三〇―一二〇〇）が、「韓文は近づきがたいが、欧文はまねることができる」といっているのは、韓愈の文は、混沌とした中にエネルギーがあるのに対し、欧陽修は、完成された散文であるからであろう。そして、朱熹のことばのように、後世実際に手本として学ばれたのは、欧陽修の文であったように思われる。

欧陽修は、かれが官吏採用試験たる科挙の試験官となったときに、平生の主張を適用して、平易な散文をすぐれたものとして採点した。これは、官吏になることが、出世の道であった当時の中国に大きな影響を与えた。もちろん、すさまじい反対が起こったけれども、結局は欧陽修の主

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com